# JPALS 実践記録（ポートフォリオ）

JAPAN PHARMACEUTICAL ASSOCIATION LIFELONG LEARNING SUPPORT SYSTEM

道薬誌を題材に書いてみましょう!!

## Aさん　道薬誌８月号『ブラッシュアップ講座についての実践記録』

テーマ（タイトル）：医療薬学　ブラッシュアップ講座　地域における病院薬剤師と薬局薬剤師の連携
北海道科学大学薬学部薬学科　社会薬学系地域医療薬学分野　准教授　伊東　佳美先生

学　習　内　容：道薬誌８月号（Vol.40　No.8（2023））Ｐ４－10

この研修のまとめ

学習目的：調査結果により明らかとなった薬薬連携の問題点を学び、実際の業務に生かすことで、患者QOLの更なる向上に寄与していく。

学んだこと：薬薬連携をさらに推し進めるには病院と薬局、それぞれの担当者が今回の調査で浮かび上がった属性の違い、重要視する情報の相違を解消できるような関係を築いていく必要がある。薬薬連携が促進されれば薬局薬剤師と他医療職との連携もよりスムーズになり、業務内容への理解が得られることによって薬局薬剤師の可能性も広がっていくのではないだろうか。

１．研究の背景

外来がん化学療法における薬薬連携ではさまざまな患者情報が提供されているにも関わらず、薬薬連携は十分に機能しているとは言い難い。これは進まない薬薬連携の原因が単なる知識・情報の不足ではないということを示唆している。そこで本研究では病院薬剤師と薬局薬剤師に対し属性の違いによる考え方の違いを業務形態から明らかにし、薬薬連携に対する意識の差異を調査する。

２．結果

・「薬薬連携を行っているか」

①行っている　②たまに行っている　③あまり行っていない　④行っていない

がん診療連携拠点病院の薬剤師：①と②を合わせると50％

がん診療連携拠点病院の処方箋を応需している薬局薬剤師：①と②を合わせると68％

・「薬薬連携の必要性」

①強く思う　②思う　③どちらともいえない　④あまり思わない　⑤思わない

がん診療連携拠点病院の薬剤師とがん診療連携拠点病院の処方箋を応需している薬局薬剤師の両群において①と②を合わせると90％を越えた。一方、がん診療連携拠点病院の処方箋を応需している薬局薬剤師は、がん診療拠点病院の処方箋を応需していない薬局薬剤師に比べ「薬薬連携の必要性」のスコアが優位に高かった。

・「ジェネラリスト及びスペシャリスト志向について」

病院薬剤師はジェネラリスト及びスペシャリスト志向の両群とも、薬局薬剤師より高いスコアを示した。一方、がん診療拠点病院とがん診療連携拠点病院以外の処方箋を応需している薬局薬剤師間の比較では、がん診療拠点病院の処方箋を応需している薬局薬剤師でそれぞれ有意なスコア上昇あり。

・「薬薬連携を実施する上で最も必要と考えられる情報」

がん診療拠点病院の薬剤師：レジメン＞疾患名＞薬局の指導内容＞副作用の対応＞副作用の症状＞告知の有無＞検査値＞その他

がん診療拠点病院の処方箋を応需している薬剤師：レジメン＞院内の指導内容＞院内の治療内容＞副作用の対応＞疾患名＞副作用の症状＞告知の有無＞検査値

３．考察

がん診療連携拠点病院の処方箋を応需している薬局薬剤師は、がん患者の治療経過や薬剤に関

する知識、診断までの背景等を把握する必要性の中で、がん診療拠点病院以外の処方箋を応需している薬剤師より「薬薬連携の必要性」を高く意識し、同時に「ジェネラリスト及びスペシャリスト志向」も高くなったと考えられる。
また病院薬剤師が薬局薬剤師に比べ、「ジェネラリスト及びスペシャリスト志向」が優位に高かった要因としては、臨床業務量が専門薬剤師の資格取得の差となり得ると考えた時、病院薬剤師は臨床業務への積極的な取り組みが求められていること、加えて生涯学習への意欲を高めるきっかけが多いためと思われる。

「薬薬連携を実施する上で最も必要と考えられる情報」の調査において、病院薬剤師と薬局薬剤師間で情報の優先順位に差が見られた理由としては、病院薬剤師はレジメンのチェックにおいて、がんの部位を含めた詳細な病名が必要となるため、「疾患名」が「レジメン」の次に高くなり、薬局薬剤師はレジメンに沿った治療の中で患者と関わるため、「レジメン」と「院内の指導内容」「院内の治療内容」を重視していることがこの違いの一因と考えられる。

以上の調査結果より、病院薬剤師と薬局薬剤師は共に薬薬連携の必要性を強く認識していることが明らかとなった。つまり薬薬連携が十分に機能していない理由が、病院薬剤師と薬局薬剤師間での連携の必要性に対する意識の差によるものではなく、病院薬剤師・薬局薬剤師というその属性の違い、それぞれが重要視する情報の相違が連携における阻害因子になっているものと考えられる。

## Bさん　道薬誌９月号『ほっかいどう・おくすり情報室から』

| |
|---|
| テーマ（タイトル）：エナジードリンクの危険性について |
| 学　習　内　容：道薬誌９月号（Vol.40　No. 8（2023））P28－29 |

この研修のまとめ：
学習の目的：エナジードリンクによる健康被害の実態を学び、薬剤師として適切な情報提供ができるよう知識を整理する。
▶エナジードリンクとは
　主にカフェイン、タウリン、グルクロノラクトン、ガラナ、ビタミンなどを添加した飲料。嗜好飲料としてだけでなく活力増強・眠気覚ましなどの目的で利用される。あくまで〈食品〉であるため〈医薬品〉のような効能を謳うことや確実な効果を期待するものではない。
▶エナジードリンクによる健康被害
　エナジードリンクを多量摂取することにより主成分のカフェイン中毒を引き起こされる危険性がある。カフェインの許容量は個人差が非常に大きいため、過剰摂取の判断は自身の体調変化を見て管理する必要がある。
▶カフェイン中毒の症状
・中枢神経系の刺激によるめまい
・心悸亢進（心拍数の増加や血圧上昇）
・精神症状（興奮、不安、不眠など）
・消化器症状（下痢、吐き気など）
▶国内での死亡事例
　2016年、20代日本人男性が眠気覚まし目的で日常的なエナジードリンクの摂取に加え、カフェイン錠剤を併用したことによりカフェイン中毒を生じた事例であった。このようにエナジードリンクと医薬品またはアルコールを同時に摂取したことによる症例はほかにも複数報告がある。
▶飲用の際の注意点
　厚生労働省のQ&Aには次のような記載。
・製品の表記をよく読むこと
・他のカフェイン含有製品と併用しない
・１日に何本も飲まない
・カフェインと併用を避ける必要のある医薬品とあるため、服用中の場合は注意（一部抜粋）
▶エナジードリンクと医薬品
　市販の風邪薬や鼻炎薬の中には、副作用によ

る眠気を軽減する目的でカフェインが配合されている製品が多くある。

風邪などで体力が落ちているとき、活力増強を期待してエナジードリンクを飲用したくなることもあるだろうが、カフェイン含有の風邪薬との併用には注意が必要である。

またテオフィリン系薬剤はその類似構造からカフェイン併用により相互に代謝を阻害することでテオフィリン・カフェイン中毒を引き起こす可能性があることは薬剤師として必ず理解しておかなければいけない知識である。

▶エナジードリンクとアルコール

アルコールとカフェインを同時摂取すると、カフェインがアルコールによる鎮静効果を抑制してしまい、結果的にアルコールの過剰摂取につながる恐れがある。昨今、『エナジードリンクカクテル』なるものを提供する店舗があるようだが、カフェインの作用によりアルコールを飲みすぎていることに気づきにくくなる弊害には注意が必要。

研修の感想：エナジードリンクはいまやコンビニやスーパーマーケットなどどこでも購入可能な商品であり、またパッケージのスタイリッシュなデザインから特に10代から20代の若い男性に人気の印象がある。あくまで〈食品〉であることから医薬品と違い購入の規制や使用の厳密なルールは設けられていないが、含有するカフェインやタウリンは医薬品としての効能効果が指定されている成分であり、過剰摂取による健康被害の可能性については購入者自身も理解して飲用することが求められる。

薬剤師綱領の一文にあるとおり【薬剤師は広く薬事衛生をつかさどる専門職としてその職能を発揮し、国民の健康増進に寄与する社会的責務を担う】必要があり、日常業務で普段取り扱う医療用医薬品や一般用医薬品についての知識のみならず、食品など医薬品以外の製品が健康に及ぼす悪影響についても知識を深め、必要に応じて一般の方々に適切な情報提供ができるように努めなければならないことを、この研修を通じて再認識する良い機会となった。

コメント：

JPALS実践記録シリーズの第3弾となります。過去2回の記事でも触れていますが、ポートフォリオは「まとめて終わり」ではありません。自身の成長ツールとして振り返り活用することが重要になります。ただの資料の寄せ集めにならないように①見やすい形式、②活用することを意識しましょう。では、そのような視点からAさん、Bさんのポートフォリオを読んでみます。

Aさん、Bさんともに項目立てられた形式になっていてとても見やすいです。項目立てをすることで、振り返ったときにどのような視点で学習したのかまた必要な情報を効率的に収集することができますね。

では、活用するという点ではどうでしょうか。JPALSのシステム上では難しいですが、もし、形式に自由度があれば、重要な図表などはポートフォリオに残しておくと振り返りの際に役立つかもしれません。Aさんのポートフォリオでは、「薬剤師として適切な情報提供に生かせるようにエナジードリンクに関する知識を整理する」という学習目標に対して、カフェインと医薬品の相互作用リスクといった情報提供と関連付けて記載されています。このまま自身の業務にも活用できそうな研修内容ですね。Bさんのポートフォリオでは、「薬薬連携の問題点を学び業務に生かすことで患者QOLの向上に寄与する」という継続的な学習が必要となるような大きな学習目標を設定し、今回は薬薬連携の問題点について学んだことが読み取れます。今回学んだことを「業務に生かす」ために、どのように活用していくのか具体的な方策や自身の発想など能動的な要素を取り入れてみてはどうでしょう。自身の考えや今後やるべきことが凝縮された、より充実したポートフォリオになると思います。

（北海道大学薬学部　講師　鳴海　克哉）